

「聞く人」の小説

『私をくいとめて』綿矢りさ

朝日新聞出版

阿部公彦

志賀直哉の「小僧の神様」は国語教科書でも定番で、読んだことがないという人を探すのが難しいほど有名な作品だが、その結末は一種の「詐欺」みたいなものでもある。黒子に徹していた語り手が作品の最後で彗星のごとく登場し、すべてをぶち壊しにしようのだ。ところが読んだ側は、ぶち壊しどころか「よくやった」「すごい」との声をあげたくなる。不思議な読後感である。

綿矢りさという作家も、何気ない風を装ってそんな見事な「詐欺」を働きそう

な気配があると私は常々警戒していた。そしてこのたびの『私をくいとめて』である。やっぱり、と思う。食わせ者の片鱗がこの小説からもうかがえる。長らく「詐欺」を警戒していた者としては、うん、うん、とうなずきたくなる。

主人公の「私」は何だか素直で純情そのうな雰囲気と漂わせた三十過ぎの女性。低空飛行気味のプライベートライフだが、極端な不幸の匂いはしない。憎悪や怨念や血なまぐさい犯罪とも無縁。会社でミスをしたり、肩こりに悩まされたりはす

るものの、深刻な葛藤ではない。

そんな彼女には、ややあまい関係の、同じ町内に住む多田くんとかいう男の友人がいて、ときどきおかずを恵んでもらいにくる。まさかこの男と付き合うわけじゃないよね？ と思っていると、話はどうぞんぞういう方向に進み——まあ、ネタバレというほどのこともないの、言っちゃうと——実際二人は付き合うことになる。これだけ聞くと、月曜九時どころか、土曜九時のドラマのようだと、思う人もいるかもしれない。何しろ新聞

連載だし、作品をかざったわたせせいぞうの心地良いイラストともあいまって、あふれるほどの安心感と日常性を感じそうになる。

しかし、実はこの多田くんという青年はこの作品ではそれほど重要ではない。作品全体のあたたかいトーンもあって作家もそれほどひどい扱いをするわけではないが、「托鉢の器を持った修行僧」などと見立てられる青年は最後まで「汚名返上」とはならない。ほどほどにいい人で嫌みもないが、正直言って凡庸。どこがいいのかよくわからない。そのかわり、この作品には「A」と呼ばれる変な「声」が出てくる。簡単に言えば「もうひとり私の私」である。ジキルとハイドで言えば、「私」の心の暗部から出てくるからハイドのほうになる。

ただ、ハイドのわりにこの「A」はけっこういい人のものである。このあたりが作家のしたたかなところでもある。友人のようでもあるし、召使いのようでもあるし、ちょっとお母さんのようでもある。最後はまるで彼氏だ。

この「A」があまりに小説になじんで

いるので、読む方としてはちょっと困ってしまふ。「A」は単なる比喩なんだろうか。象徴なんだろうか。寓話としてはあまりに無防備というか、いい加減というか、馴れ馴れしいので、意味ありげな役割を読みこもうとしてもやりにくい。通常の小説なら、「もうひとりの私」となれば葛藤と深刻さの特等席である。小説語りの切り札である。ところが『私をくいとめて』の切り札は、いつの間にか主人公とライトでカジュアルな話をかわしているのである。そして小説の結末では、この「A」と語り手との間に妙に哀切感の漂う別れの場面まで用意され、私たちはけっこうそんな終わり方を素直に読んでしまう。感動さえする。ちょうど「小僧の神様」のむちゃな結末に、つい膝を打ってしまうのと同じように。

それにしても、どうしてこんなに「A」が活躍できるのだろう。

そこであらためて思うのは、綿矢りさの本領が甘さでも安心感でも輝かしさでもなく、苦みだということである。この作家はそれを静かに小出しにする。苦みは主人公の言葉として発せられるより、

主人公が耳にする他者の「声」にまぎれこむのである。考えてみれば、読み応えのある場面では主人公はだいたい受けにまわっている。整体師に極上のマッサージをほどこされる場面も、飛行機がひどく揺れる場面も、イタリアの友人宅でのホームパーティーも、主人公はひたすら受け身である。綿矢りさの主人公は無防備に語るように見えて、しばしば声をふさがれているのだ。「語る人」ではない。そのかわりに彼女は「聞く人」として小説をつくる。「A」の声がうまく小説になじむのも、主人公の耳がそれをとらえて表に引張り出すからである。声を許容する主人公だからこそ、声が生きる。

作中、一番どきどきするのは、整体師の「つらい恋をしている女性の身体からは、山羊のおいがするんですよ」との台詞だった。こんなこと言わせるのはさすがだなあ、と思う。それに比べれば、自分は「根本的に人を必要としない」との主人公の最後の告白は穏便なものだろう。ただ、その穏便さにだまされるのが綿矢りさを読むということでもあるのだ。